元気あおもり応援隊会議（名古屋圏）

「元気あおもり応援隊会議（名古屋圏）」を令和４年５月２３日（月）午後５時４５分から名古屋東急ホテル（愛知県名古屋市）で開催しました。

当日は、１０名の応援隊の方々が参加し、会議では「令和４年度『選ばれる青森』への挑戦～コロナを乗り越え、世界の宝　縄文と共に未来へ～」をテーマに意見交換を行いました。

その概要は次のとおりです。

（青森県知事　三村知事(以下知事)）

本日は大変お忙しい中、「元気あおもり応援隊会議」に御出席を賜り、誠にありがとうございます。

この２年間、新型コロナ感染症の影響により、開催中止を余儀なくされておりましたが、本日、こうして直接お会いでき、自由闊達な意見交換ができますことを嬉しく思います。

また、皆様方には、それぞれのお立場から「あおもりの元気づくり」に御支援をいただいています。これも厚く御礼申し上げます。

青森県では、これまで「生活創造社会」実現に向けまして、「世界へ打って出る」視点も取り入れながら、「攻めの農林水産業」を展開いたしますとともに、観光分野をはじめ、地域において「経済を回す」取組を重点的に進めてきました。

その結果、農業産出額や農林水産品の輸出額は堅調に推移してきたほか、外国人延べ宿泊者数や創業・起業件数も増加するなど、様々な分野において、取組の成果が着実に現れてきたところですが、一方で、長期化する新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、本県においても依然として幅広い分野に大きな影響を及ぼしています。

県では、感染拡大防止や保健・医療提供体制の整備に、引き続きしっかりと取り組みますとともに、社会経済回復の変化にも的確に対応しながら、地域経済の早期回復とコロナの先を見据えた事業展開の推進を図るため、県産品消費拡大や販売促進、観光需要の喚起など、経済を回す取組の再起動や各産業分野におけますＩＣＴ化の促進など、デジタル化の推進にも積極的に取り組んでいるところであります。

こうした中、昨年７月には、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産登録が実現いたしました。本当にありがとうございました。平成 17 年に登録を目指すことを表明して以来、長い道のりとなりましたが、三内丸山遺跡をはじめとする縄文遺跡群の価値が世界から認められたことは、大変誇らしく、喜びに堪えません。

今後、関係自治体と連携しながら、このかけがえのない遺産をしっかりと守り、次の世代に引き継いでいきますとともに、その価値や魅力を国内外に積極的に発信しながら、青森県を訪れてくださる方々に一層の感動を感じていただくことができるよう、活力と魅力あふれる地域づくりに向けて取り組んでいきたいと思っております。

さて、本日は、この世界の宝縄文遺跡群を活用した取組をはじめといたしまして、国内外から「選ばれる青森」を目指す本県の様々な取組につきまして御説明させていただきますので、何卒忌憚のない御意見・御提案を賜りますよう、お願いを申し上げますとともに、青森県のイメージアップや情報発信などへの一層のお力添えを重ねてお願い申し上げます。

【令和４年度「選ばれる青森」への挑戦～コロナを乗り越え 世界の宝 縄文とともに未来へ～】

企画政策部長が資料に基づき県の取組を説明。

（安藤昇氏）

縄文遺跡群について、教育の場ということで、修学旅行をもう少し誘致したらどうかと考えます。

私の方で調べてみたところ、青森県の修学旅行は、大半が北海道から来ているというケースが多くて、やっぱり首都圏とか、そういうところから呼んだ方が今後につながるし、まさに世界遺産を使ってやれる話じゃないかと思っています。

修学旅行の誘致については、多分、教育委員会や旅行会社といったところが拠点になってやることになっているかと思いますが、思い切って青森県知事がウェルカムするというふうなことを考えていった方が、誘われる方も、受け止めやすいんじゃないかなという想いがあります。

今、コロナ禍で、どこの学校でも修学旅行は、２泊３日ぐらいから日帰り等短期での実施になっていると感じています。

しかし、今後コロナが段々収まっていきますと、まさに新しい修学旅行の在り方を考えていけるのではないかと思います。

青森県世界文化遺産登録推進室が作成した、祝 世界遺産登録のクリアファイルを見たことがありますが、子どもたちもクリアファイルはよく使うと思いますので、そういったものを反響が期待できる、これから検討してみたいという学校の生徒の数だけ送ってあげて、学校で使ってもらうといったことができると、凄く喜んでいただけるのではないかと思います。

また、私が最近行ったところで、「これ、使えるな」と思ったのは、岐阜県の関ヶ原町の取組です。一昨年、関ケ原古戦場記念館という新しい建物が出来きていますが、県の担当者に一度見ていただくと良いのではないかと思います。

そこは、売りがＶＲ（バーチャル）、仮想空間なんです。青森に関しては、縄文遺跡、縄文時代の生活とか、そこでもいろいろと争いがあったはずですし、また、動物を獲るのにいろいろ苦労しながらとか、こんな物を食べていたといったことが実感できるような、ＶＲを活用した取組を検討してはどうかと考えております。そういう施設を造るということではなく、ソフト面を、青森県内にある遺跡に取り入れることができたら、子どもたちにも分かりやすのではないかと思います。例えば昔の風景を見せて、こんな感じだったのかとイメージしてもらえるようになるといったことができると良いのではないでしょうか。実体験に類するようなことができる工夫

をしていったらどうかという提案です。

また、いわゆる経済を回すためには、人を回さないといけないと考えています。どのスポットでも、修学旅行で生徒が行った先は、大人になってから再訪する傾向が強いというデータがあります。ＮＨＫの昔のアンケート調査でも、「東北６県、どこの県に一番行きたいですか」という回答で圧倒的に青森が多かったと記憶しています。若い時、子どもの頃に一度青森に呼んであげると、また青森に行きたいと思ってくれると思います。そのために、まず学校現場でお誘いすると、上手く人が回るようになるんじゃないかと考えています。

また、学校、青森の小中高校の学校との交流なども同時にやっていくと、人との交流ができていいのではないかと思います。

（知事）

本当にありがとうございます。

修学旅行の後々も含めての非常に大きなパワーというんでしょうか、観光だけではなくて物販も含めて、非常に大きなものがあると、私共も考えているところでございます。

かつて、夜行寝台日本海が大阪から出発していた頃は、夜に乗ると朝に青森に到着するものですから、関西からの旅行者が凄く多かったのですが、どんどん新幹線に替わっていくという流れの中、仕組みを変えていく、変えざるを得ないということで、いろいろ工夫をしているというのが、私共の状況でございます。また、当地域ですと、ＦＤＡさんの就航が非常にパワーとなっていまして、修学旅行ですと、人数の多い学校だと全員乗れないといった課題もありつつ、今、修学旅行もそれぞれチームごとにいろいろなところを選ぶという形もありますので、可能性に期待していきたいと思っています。

実は、国内というよりも、この十数年来、台湾の子どもたちと本県の子どもたちとの交流をやってきておりました。台湾の場合、７泊とか、一番長いところでは１４泊とか、青森県内を回って歩いたり、長期で一緒に授業ですとか、お土産品を台湾の食材と青森の食材で何か作ろうとか、そういった活動をしていました。現在はコロナ禍で休止しておりますが、これまで２５校とやり取りしていました。

そのぐらい、実は台湾とうちの子どもたちとやり取りということが非常に盛んになっていまして、それが、エバー航空の定期便にも繋がっていったという経緯があります。

このように修学旅行の効果は大きいものがあると思っております。

当面、まだ海外の方は、多分、秋・冬からではないかと感じていますが、修学旅行だと、前年とか前々年ぐらいから仕掛けないと段取りできないものですから、やはり国内が主体となってくると思っています。

また、大人の修学旅行、所謂ＭＩＣＥ（マイス）を企業の方に働きかけていきたいと考えています。

今、先に回復してきたのは、ＭＩＣＥの方で、この間も水力発電の連合会とか、そういう方々が、青森県は風光明媚、かついろんな発電もあるものですから、見に来てくれたりということがありました。

子どもたちから、海外から大人からということを段取りしますが、今日は観光国際戦略局長が来ていますので、局長からお願いします。

（観光国際戦略局長）

今、御指摘いただいたとおり、首都圏などの学校では、修学旅行の訪問先として、これまでの関西、沖縄、北海道といった、いわゆる定番地域から、コロナの影響も相まって、より地方への分散が進んでございます。

特に、近年、教育改革に伴って、こうした教育旅行は、生きる力を育む場として、学校では体験できないような豊かな自然や文化、人々との触れ合いなど、体験的な学習を重視する傾向にございます。

青森県には、こうしたニーズに合致する縄文の歴史・文化の体験学習は勿論のこと、世界自然遺産白神山地での環境学習、あるいは、太宰治を学ぶ文学の学習、ねぶたをはじめとした祭りや農家民泊を通じた、食や人との触れ合いなど、青森ならではの魅力溢れるメニューが沢山ございます。

これらを活かした誘致が重要と考えております。

特に、縄文をテーマとした教育旅行については、今年度、初めて縄文の遺跡を回る旅行商品に対して、バスの助成を行うこととしたところであり、また、首都圏だけでなく、新規航空路線が就航した関西圏なども含め、これまで以上に情報発信に力を入れて参ります。

更に、先ほど、ＶＲの活用の御提案がございました。縄文の遺跡は、一見しただけでは魅力が伝わりにくい部分もございます。現地の遺跡ガイドの方々は、縄文は地下に真実、地上にロマンという言葉を口にしておりますが、縄文が持つロマンや価値を子どもたちにも分かりやすく伝えられるような、いろんな手法も研究して参りたいと思います。

（知事）

しっかりとまた対応していきたいと思っております。

（内田俊宏氏）

私からは２点ほど提案がありますが、その前に冒頭で知事から御挨拶の中にもあったように、やはり青森県、アフターコロナに向けて世界遺産の活用というのは、非常に重要だという認識で、思い起こせば、新幹線の前日の開業もちょっとタイミングが悪かったですし、今回の世界遺産登録もコロナ下ということで大分悪かったんですが、これから経済を回す、経済を取り戻すという観点で非常に観光振興が重要だと考えております。

おそらく、７月の参院選以降に関しては、かなりコロナ対策も緩和の方向にいくのではないかと考えておりますし、先ほど、企画政策部長からお話があったように、名古屋のマーケットというのは、非常に堅調で、元々それほどインバウンドが多くなかったこともあり、コロナの影響も、関西に比べると非常に軽微ですし、製造業も半導体の影響がありつつも、非常に新車販売が好調ですので、そういった意味で、名古屋マーケットをターゲティングしていくのは非常に重要だと

思います。

また、１１月にジブリパークがオープンしますので、ＦＤＡさんも是非、青森から３便、４便と沢山お客さんを乗せていただければと思います。

そうした前提で１つ目の提案です。

これまで、世界遺産の縄文遺跡群のパンフレット等も手元に配付していただいていますが、自然と共生する持続可能な縄文遺跡群の縄文文化は、昨今のＳＤＧｓの概念、考え方にも非常に合致しておりますので、もう少し、ＳＤＧｓと絡めた売り出し方をしていくことが非常に効果的ではないでしょうか。

他に、パンフレットに関して、ちょっと文字情報が多すぎて、シニア層の方には、あまりにフォントが小さ過ぎたりとか、若い人も含めて集客するには、もっとビジュアルを重視した方が良いのではないかと思います。今手元にあるパンフレットは、後ろにＱＲコードもありますが、このＱＲコードを利用しても、そこも文字情報が多過ぎて、ちょっとビジュアルがあまり良くないと感じました。

また、コンテンツそのものも情報ですから古くてもいいですが、やっぱりパンフレットが、ちょっと昭和チックな、中途半端な古さになっているので、この辺のコンテンツの見せ方は、少し工夫していただければありがたいなと思います。

ＳＤＧｓにもっと絡めてＰＲしたらいかがか、というのが１点目です。

２点目ですが、米価について、全体に今年はかなり下落しておりまして、CoCo 壱番屋も助かってはいますが、青天の霹靂とはれわたりに関しても、本県の本命のブランディングに関して気になっています。東北や九州、北日本といった、地方部では丁度良い価格帯だと聞いておりますが、大都市圏のブランド米、特Ａ米の中では、本当、知名度が低くて、価格もちょっと微妙に安いといいますか、特Ａ米としては安くて、本当に安いお米よりはちょい高いという価格帯で、デパ地下にも置いてはありますけれども、やっぱり富裕層の方が手を出さずに、ちょっと売れ残って割引になったりしているという状況にあります。

良いお米は、例えば紙で包んで中がフィルムで透明で見えるような形になっていたり、そこに金沢とかあの辺の地域の方は上手く、高そうなイメージの絵を使ったりされています。その辺のブランディング戦略上、場合によっては、エリアごとに少しパッケージを変えてみるとか、何かもう少し差別化のための工夫ができないかなと思います。

コーヒー豆などでも、ブレンドの方が美味しかったりしますので、思いつきですけども、まっしぐらとかも含めて、青森県産ブレンド米というような、別の形で、最適なブレンドといったような売り出し方も一度検討していただいてもいいのかなと思います。

（知事）

ありがとうございます。

縄文の自然共生と平和の概念といったＰＲについても、一周年に向けた戦略を考えておりますので、企画政策部の方から話させていただきます。

お米につきましては、まっしぐらは、元々ブレンド米として出ていましたが、これ美味いから単品で売って欲しいという話が沖縄・九州とか、西の方から出まして、出してみたら、意外と単品で売れてという経緯がありました。

ただ、今の米全体の課価格が下がっている状況の中においては、どう戦略を組み立てていくかというところから考えています。今は、中間品種としての甘さとモッチリ感のある「はれわたり」で、少し勝負をかけたいということで、農林水産部長からもお話させていただきます。

（企画政策部長）

それでは、私の方からＳＤＧｓに絡めてのＰＲについてご説明いたします。

１年前に世界遺産に登録された時に、知事自身が、自然との共生、平和で協調的な社会については、ＳＤＧｓを唱える前から、実は縄文時代に青森の地で１万年間続いていたという話をしました。やはり大事なのは、その理念のところですので、我々はいろいろな場面で縄文のＰＲの中でも、ＳＤＧｓの理念と絡めた話をしていく必要があると考えています。

ある意味、青森では、縄文時代の中で、既にＳＤＧｓという理念、概念が達成されていたということが多分事実だと思いますので、上手くそれを縄文と絡めてＰＲしていきたいなと思っています。

また、ＳＤＧｓは、自然との共生もありますが、元々は、誰も取り残さないという、いわゆる福祉の面、貧困への対策というところもありますので、その辺も含めてＳＤＧｓのＰＲを進めていきたいと思っております。

（農林水産部長）

お米の関係の御意見に対しまして、まず、青天の霹靂、認知度の状況でございますけども、米専門に研究しているところでいいますと、５３％と、他のブランド米より若干下回りますけども、それほど遜色のないというふうな状況になってございます。

青天の霹靂、他県に比べて、青森県としては、初めて特Ａになって、お陰さまで７年連続という、落ちることもなくきていて、そのお陰もあって、まっしぐら、それからつがるロマン、こちらの価格も連動して上がっていくという効果を得てきております。

また、まっしぐらについては、知事からも話がありましたように、業務筋で非常に高い評価を得ております。昨年、非常に米余りという中ではございますけども、非常に関西圏では、米が温かくなりすぎて、米が白くなる現象が全国的に出る中で、非常に安定した品質であるというふうに卸さんからも高い評価をいただいてございます。

この価格でこの味、是非、まっしぐらは継続してお願いしたいというふうに言われてございます。

また、新しく、今年から作付けが始まりましたけども、「はれわたり」という品種、これ、青天の霹靂とまっしぐらはさっぱり系なんですけども、まっしぐらにこしひかり系、それからあきたこまち系が入っておりまして、粘りと柔らかさがあると。

それから、青森県、八甲田山を境に津軽と県南がございますけども、青天の霹靂は、津軽の本当に良い条件のところでなければ特Ａが取れないんですが、この「はれわたり」という品種は、県南地方でも十分特Ａが狙えると、そういうふうなデータをいただいてございますので、是非、期待していただければなと思います。

また、ブレンド、青森ブレンドと、御意見として研究はしていきたいと思いますが、そもそも、優れたブレンド米として、多くの方々の口に入っているというふうな状況でございます。

そうした強みでございますので、そうしたものとのバランスも考えながら、新しい、先ほどのパッケージも含めて、更に認知度も高めながら、米を、青森の米をしっかり守っていきたいと考えてございます。

（内田利浩氏）

まず、資料の方に高品質な冷凍食品を開発し、食品産業における新分野の成長を目指しますとありますが、我々、青果市場におきましても、昨今、非常に流通、それとコロナの影響もありますけども、消費形態の変化が目まぐるしく進んでいます。そういった中で量販店を中心に、野菜はもとより、果実の冷凍商品の需要が高まりつつあります。これについて、具体的に冷凍商品の案内、冷凍技術について、御教示願いたいと思います。

（知事）

この冷凍食品の分野については、この数年、４、５年前から、絶対必要になると実感しています。セールスであちこち歩いても、皆さんから欲しいと言われております。国産の野菜、果物どちらもです。

ご家庭で調理される方も全部「レンジでチン」は嫌だと感じておられるようで、冷凍したものを戻して炒めるなど、いろいろな用途があると考えられます。しかも、冷凍技術が各段に進歩して、お寿司などは、冷凍でも全然そうと分からないようなものも出ているようです。

それに合わせて、野菜関係の冷凍技術も各段に進んだということで、我々も徹底研究しなきゃいけないということで進めています。

具体の話を農林水産部からさせます。

（農林水産部長）

令和３年度から、県の重点事業として取り組んでおります。目玉の施策として取り組んでございます。

今の進捗状況といたしましては、県に産業技術センターというところがございます。そちらの方に、実は、冷凍の研究の第一人者の方が、その方の研究室出身の人が、工業分野の研究員がおります。

そうしたネットワークも活かして、今、ブロッコリー、アスパラガス、メロン、かぼちゃ、この４品目について試作品を完成させてございます。

私もアスパラガス、ブロッコリー、試食いたしましたけども、本当に冷凍食品とは思えないような出来栄えでございます。

また、今いる、ある材料、それから今、青森県に存在する加工事業者、そういうところと手当り次第に商品化するベンチャー事業のようなものも一緒に取り組んでございまして、今現在、１６事業者が郷土料理ですとか、りんご、ホタテ、そうしたものを６２アイテム、今、商品化したところでございます。

そうしたものを、これから大々的に売っていくというふうな流れになってございます。
また、県内の事業者もこの冷凍分野に施設整備をしようという法人が大分増えてきまして、いわゆる青森県で採って、青森県で冷凍する。いわゆる産地フレッシュとして、これからそういう産地も育てていくこととしてございます。

（知事）
更に積極的に進めていきたいと思います。
ホタテの貝焼きを冷凍するというと、そこまで踏み込んでいるのかという感じもしますが、最初お話しましたブロッコリー、アスパラ、カボチャは、ほぼ良いところまできたんじゃないかなと思います。その他、製品というか、加工した物もということで、更に踏ん張っているというところでございます。

（内田利浩氏）
他県においても、青森県のように、行政をあげてという部分が、なかなかないのが実情ですので、今後につきまして期待しておりますので、よろしくお願いいたします。

（知事）
野菜につきましては、本当に大産地でございますし、時期によっては、値が下がるぐらい冷凍、きちんとしておいた方がいいとか、そういうこともございますので、しっかりと進めていきたいと思っておりました。
その際はいろいろと販売、取扱方、よろしくお願いいたします。
お世話になります。

（鳴海忠孝氏）

このたびの縄文遺跡群が世界遺産登録、知事さんが長年にわたって御努力されて漸く達成されたことで、本当におめでとうございます。
今日は、食と観光の成長プロジェクトの中で、食について少し質問させていただきたいと思います。
青森県だけではなくて、ここ愛知県でも、いろいろな水産業、貝やら何やらが取りざたされています。今、日本全体でも、水産業の担い手が年々減少して、漁業の生産量も何分の１、または、ある尺度では１０分の１だとか、そういうレベルで大きく減ってきているわけです。
県の資料やネットでも調べたところ、漁場環境の水と漁（いさり）という水産研究情報誌があって、いろいろ勉強させていただいています。
その中では、つくり育てる漁業や資源の早期回復について、養殖体制の構築や藻場の造成整備が行われ、それの効果の１つとして、サーモンが、淡水や海水でも、出来ているということで、非常に御努力なされていることに対して感謝申し上げる次第でございます。
しかし、一次産業について、日本は、非常に海外に頼っておりますので、直接は関係がないか

もしれませんが、直近では、ウクライナ戦争で直接ロシアの方を通れないから、なかなか入手困難だということで、非常に難しい課題が浮かび上がってきたと思います。

そういう中では、国内のトータルの漁獲量の回復といいますか、そういうことが急務だということが、改めて浮かび上がってきたということかと思います。

私は、りんご百姓の子として生まれましたから、農地は歩いていければ、土を触って考えられる気がしますが、海は潜って、しかもその中で魚は世界を泳ぎ回っているものですから、水産業の資源をこれからどうしていくのか、また、その対策は、調査研究から資源管理、漁場の整備などにわたり、非常に難しい課題があるかと思います。

しかし、青森県は、三方が、太平洋、陸奥湾、それから日本海に囲まれているということで、逆に地理的に非常に強みがあるのではないかという思い、期待をしております。

具体的には、昔は、酒のつまみなどで、よくスルメイカが食べられていたかと思いますが、今は、少量で価格も高いものしかない状況です。

あのスルメが、私のような庶民には、今はなかなか手が届かないようになっているということで、非常に基本的な課題ですので、予算の都合もあろうかと思いますが、研究開発や藻場の改善といったことを、これからどうやっていくのかということを少しお聞かせいただければありがたいと思います。

よろしくお願いいたします。

（知事）

ありがとうございます。

水産資源につきましては、本当にそれぞれ厳しくなっていますが、中でも、イカは一番大変だと思っています。なかなか養殖して増やせるものでもありませんし、漁礁を入れたりといった様々な工夫をしておりますが、全体にイカそのものが凄く減っているというような状況にあると認識しております。

加えて、本県は、海岸線が８００キロございます。その海岸線に沿ってそれぞれ漁村集落があるわけですが、これまで、漁港も船溜まりも含めて、地先で働くように整備はしてきました。しかしながら、地先から遠い、資源管理型に相当変えていかなきゃいけないということが、漁業者も含めての総意となっています。

本県の中で、特に元気な漁師たちからも、「獲るだけの漁業ではだめだ。これからはつくり育てる漁業でなければ。」という声が上がるようになってきました。基本は、つくり育てる漁業で、マツカワガレイなど、つくり育てる漁業を進め、それから獲りに行くというようなことが主流になってきました。

従って、今、私共が整備した漁港について、いわゆる巨大な生け簀として活用しようとか、そういう考えも出てきています。

物凄く進んでいるのが、今、佐井の漁港を生け簀化していく取組です。というのも、なかなか海の仕事は危険なのと、慣れない人はできないですし、若い方が入ってこないものですから、ＵＩＪターンでも、つくり育てる漁業だったらできるのではないかと。その佐井と竜飛をそういったモデル、特に佐井は、日本でも最大級のモデルになるように、つくり育てる、こういう思い切った、大胆な方法でいかないと無理だなということでやっておりました。

そういった中で、これまで、漁港を使いながらサーモン、サケの方は安定して獲れるようになりまして、今日もこの青森のサケフェア、ホタテとサーモンのフェアをやってきましたが、このように、つくり育ててできるようになってきました。

そういった流れ、全般含めて、農林水産部から話させていただきます。

積極的に、もうつくり育てる漁業しかないだろうというのが本音の状況です。人手もないものですから。

（農林水産部長）

こちらが佐井村の取組のポンチ絵でございます。

上の方の写真の赤い、一番上のところ、赤い線がありますけど、その下の方に白いコンクリートで既存の防波堤がございます。既存の防波堤の手前、下の方が岸壁です。既存の防波堤と岸壁の間が、その下の方の絵で描いていますけど、そちらの岸壁から既存の防波堤、そこには、ナマコですとか、マツカワ、これ、カレイの品種でちょっと黄色い、カレイが阪神タイガースのユニホームを着たような、そんな見栄えでございますが、高級魚でございます。

そこで、まず、養殖をする。そこに漁業体験観光に訪れた人が、そこで体験をする。

また、既設の防波堤から、その上の方に沖防波堤というものを作りまして、そこを静穏域、波の穏やかな空間、海中を作りまして、そこにウニの漁業体験でありますとか、サーモンの餌やり体験、それからワカメの収穫体験、こうしたものをやっていこうということで、モデルとして取り組んでいます。今、わいわい、生業（なり「わい」）と賑「わい」の「わいわい」と言っていますけども、そうしたことで、この人口減少、非常に厳しい漁村集落を守っていく、水産業と一緒に守っていく取組をしてございます。

それから、イカの話がございました。

今、１回目の今年の漁で、中型いか釣り船１７隻のうち、１６隻が出航してございますが、スルメイカの資源量が、どうしても厳しいものですから、代替魚種として、アカイカ、そちらを狙って、漁に行っております。そちらで、アカイカも非常に需要が、それから料理でも何でも評価の高い魚種ですので、量が獲れれば、スルメイカで獲れない分をアカイカで稼いでいくと。そういうことで、漁場を、アカイカもそうですし、スルメイカもそうなんですが、産業技術センターのところで漁場探索システムというものを構築しまして、効率的な操業を支援しているというような状況です。

ただ、どうしても資源管理というのは、結果が出るまで、ちょっと時間がかかります。お陰さまで、マグロについては、漸く資源が回復したということで、国際的な約束も１５％増枠と、今年から大分増えていくということになりますが、中型イカ釣りとか、厳しい部分は、やはりつくり育てる漁業への転換も、今の佐井のような取組を広げていかなければならないと考えております。中心となる八戸市と共に、今後、方向性を検討していくこととしてございます。

（知事）

しっかりと漁村集落を守るためにも、つくり育てる、プラス、獲りに行く、元気な人たちには獲りに行ってもらうということで進めていきたいと思っていました。

ありがとうございます。

（森谷和生氏）

私は、縄文遺跡群のＰＲの仕方について、２つお話をさせていただければと思います。

１つは、縄文遺跡を訪れるお客様、やっぱりそれぞれ趣味や嗜好など、皆さん、別々なものをお持ちだと思いますので、そういったものに合わせて、テーマごとのモデルコースを設定して、集客した方がいいのではないかということを提案いたします。

例えば、考古学マニアは、当然、行きたいと思いますが、それに見合ったコースとか、あるいは、美術館好きのためのコースとか、温泉好きの人のコースとか、お酒好きのコースとか、そういった、もう少し細分化したコースを設定したらどうかというのが１つでございます。

２つ目は、出前講座といいますか、いろいろな自治体さんで、その施策を住民の方に知ってもらうために、市の職員さんが出かけて行って、説明会をやっておられるという事例を聞いておりますけれども、県内だけじゃなくて県外にもお出かけになって、縄文遺跡のミニ講演会みたいなものをされてはどうかということです。

ただ、出前講座については、この意見を提出した後で、県の方からお話を聞く機会があり、既に東京とか、名古屋でも開催されているということで、私共、青森・神戸線も開設していることもありますので、関西地区とか、そういった他の地区でも、どんどん開催していただければありがたいなということでございます。

（知事）

ありがとうございます。

縄文だけでなく、お酒蔵を回りながら縄文など他にもいろいろなテーマでということですね。

最近は縄文酵母を使った商品などもいろいろとできていますし、温泉と縄文とか、テーマ性を絞っていくという御指摘いただいて、是非やらなきゃいけないと思っています。

出前講座についていうと、自分自身は、りんごの出前講座、小学校と幼稚園とかに行って、りんご出前講座、全国で実施させていただいて、本当にありがとうございます。

実際に全国で実施してみて、物凄く効果を実感しています。子どもたちへの普及啓発だと、お母さん方も必ず来てくれますし、九州でもどこでも、地元メディア、マスコミも来てくれて、りんご美味しいよと、子どもたちに言ってくださったりということもありますので、縄文に関しても、本当に出前講座は役に立つと思っていました。

ただ、こちらの地域には伊勢神宮という、圧倒的なコンテンツがありまして、そこにジブリコンテンツができるというのは凄いです。今まで、どちらかといえば高齢層が多かったかと思われる伊勢神宮に加え、今度は、ジブリコンテンツで、若い人や親子も取り込める可能性が大きくなったんではないかと思います。そういったことも含めて期待していましたので、その辺もまた、ビジネスベースで話し合いをしたいと思っています。

（観光国際戦略局長）

まず、縄文を活用した観光促進についてでございますが、縄文遺跡群は、非常に広範囲に所在してございますので、遺産登録を契機とした周遊促進、これは観光客の増加と観光消費額の拡大に直結する、極めて重要な取組であると考えております。

コロナ禍によって、旅行形態の少人数化や密でない地方への関心が高まるなど、観光マインドが大きく変化してございまして、御提案いただいたとおり、旅行客の趣味・嗜好に特化した旅やアウトドア、アクティビティなど、ニーズに応じたＰＲや仕掛けづくりが重要と考えております。

具体的には、縄文のみならず、もう一つの世界遺産、白神山地、あるいは県内、５つの美術館がございまして、この５館連携によるアートのツーリズムなど、既存のものも組み合わせながら、相乗効果を創出する観光コンテンツの開発を進めてございます。

あるいは、先ほどお話がございました、ＳＤＧｓ、地球環境や地域社会に配慮した旅。例えば、観光客が旅先でお金を払ってごみ拾いをするようなことが魅力的なコンテンツになるわけで、縄文についても、旅行者が遺跡を守る役割を担うプランなどのような、新しい旅の動機となる旅の楽しみ方を発信し、国内外からの誘客に取り組んで参りたいと思います。

（知事）

今日は三内丸山遺跡センターからも来ていますので、出前授業の話をいたします。

（三内丸山遺跡センター副所長）

森谷さんが仰ったように、出前講座につきましては、県内では、平成２１年度から毎年１０数回、子どもから大人まで、知事にも年、１、２回、おいでになっていただきながら講座をしておりますし、県外におきましても、昨年度は、東京で２回、こちら、名古屋でも、中日文化センターと名古屋情報センターと連携して、世界遺産登録を記念した６県のリレー講座というものを開催しておりました。

講座につきましては、大変効果がございまして、引き続き続けていきたいということと、４道県で共同してフォーラムを県外で開催しておりまして、毎年、東京で行っておりますが、これから３か年は、今年度は九州、来年は関西、３年目は、こちら中部地区で開催する予定ですので、このフォーラムで縄文遺跡群の価値と魅力を皆さんに知っていただくような活動をして、機運をもっと盛り上げていきたいなと思っておりましたので、今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

（知事）

よろしくお願いします。

（司会）

折角の機会ですので、本日の、久しぶりに開催したということで、感想等でもお聞かせいただければと思います。

（扇谷恒夫氏）

私が住む蒲郡市は温泉が有名ですが、観光面でピンチだと感じています。これまでは、団体客や海外の方が多かったそうなんですが、今は全然来ない状況だということです。温泉旅館全般についても、有名なところでも４月に８日間くらい休業していたりします。最近、いろいろ改装されて、個人用のお風呂や部屋から外を見れる足湯を作ったりと、いろいろな形で、お客さんを誘致するために苦労されています。

私も３日ほど前に白浜温泉に行ってみましたが、浦島という３００人から４００人の集客が可能な旅館なのに、お客さんが１割いるかというところでした。

観光地で、今、これから、お客さんをどういうふうな形で誘致するのかが、一番悩みの種ではないでしょうか。

今までは団体客が沢山来ていましたが、どういいった形で、個人向けなど魅力ある、来ていただけるようということを考えることは、難しいことだと思います。

旅館の女将からも話を伺いましたが、やり方を変えていかなければ難しいということでした。

一方、昔の良さも忘れられないということもあるので、青森もいろいろ温泉がありますが、そういうところでも考えていただければ、魅力になると思います。

それからもう１つ、青森のねぶた。行くのはいいけれど泊るところがないということがあり、旅館とイベントが上手く合致すればいいなということが課題として挙げられると思います。

（知事）

青森県も、この観光の問題について、例えばインバウンドが一旦６倍に伸びた後ゼロになったということがありました。

昨今は、何とか個人客を中心に何とか戻り基調にあるところでございます。

様々な工夫を考え、旅館、ホテルにいろいろと支援をしていくにしても、企画が大事です。いろいろと面白いことを考えておいて、次のための方策に対して支援するという仕組みですとか、今は、バス業界もタクシー業界も大変なので、改めて、今こそ、団体客を取りにいこうということで、観光国際戦略局が積極的に進めております。

（観光国際戦略局）

今、お話があったとおり、青森もやっぱり器の大きい旅館やホテルが、非常に苦しんでおります。個人客は、かなり戻ってきているわけですが。

どこの都道府県でもやっておりますが、いわゆる県民割ですね。地元のお客さんに楽しんでいただく工夫をやっておりまして、本県の場合は、単に値段を割り引くだけじゃなくて、地域の旅館、ホテルの方々と一緒に、何かしら新しい企画を作ろうということで。

例えば、温泉であれば、岩木山を見下ろす温泉では、冬になると、雪中サウナ。サウナをした後、雪だまりに飛び込むというような新しい企画を設けるなど、様々な工夫をしております。

それで、１つ御紹介したいのが、昨年の全国全体の延べ宿泊者数というのは、コロナ前に比べて約半分、まだ５割しか戻ってきていないんですが、青森県は７４％まで戻りました。これは、全国の中で２番目に高い伸び率なんです。これは、本当に事業者の皆さんが創意工夫をして、それを県民が支えている、そういう構造が、今、出てきております。

更に、今、知事がチラッとお話したのが、団体が弱いものですから、今回の議会で、団体旅行を伸ばすような新しい仕掛けも、今、一生懸命考えているところでございます。

いろんな形で、事業者様の背中を押すような取組を進めていますので、是非、皆様もＦＤＡで青森県に、夏、増便になりますので、お越しいただければと思います。

（猪狩良和氏）

御無沙汰しております。

私が初めて三村知事をお見かけしたのは、全農あおもりさんの野菜の大会か何かの時で、御挨拶の際に、Ｔシャツを脱がれて、またもう一枚Ｔシャツが出てきた姿を拝見したり、何という元気な方かなというふうなイメージを受けまして、それ以来のファンとさせていただいております。

三村知事、これからも益々頑張っていただいて、青森をしっかり盛り上げていただける知事だなと。よその県の者ではございますけど、応援させていただきますので、よろしくお願いします。

（知事）

ありがとうございます。

相変わらず張り切ってやっておりましたので、お任せください。

（四橋善美氏）

この間、３年ぶりに東京へ行ってきました。結婚披露宴に出席するためでしたが、３年待ちの披露宴で、子どももできて、家族披露宴。それぐらい時間が経ってしまいました。

青森へも３年は行っていないのですが、この夏には、久しぶりに青森へ帰ろうかと思っています。その時はフジドリームエアラインさんにお世話になるかと思います。

また、私はお酒もたしなみますが、そうすると酒の肴が必要なんですね。最近、スルメは少なくなっていると実感しています。また、私はみがきにしんが好きで、こんにゃくやタケノコと煮付けたものなんかが食べたくなるわけですが、名古屋ではお店を１０か所探して漸くというくらい、みがきにしんを売っているところが少ないです。

商売になるかどうかは分かりませんが、是非みがきにしんを名古屋でも売ってほしいなと思っております。

（知事）
今度、イオンフェアに提案してみてもいいかもしれませんね。
先生がお元気で嬉しいです。

（内田俊宏氏）
先ほど、ねぶた祭りの時期に宿泊施設が空いていないという話がありましたが、昨今のコロナ以降のアウトドアブームで、ソロキャンプも流行っていますので、空き地を活用して、キャンプができるようにしたりすると、物凄い若い人もくるんじゃないかなと思いました。

（知事）
土地の管理の問題もございますので、いろいろ考えなければいけないところだと思います。

（扇谷恒夫氏）
今日、名古屋情報センターに寄ってきたのですが、明日から愛知県の金山駅で青森・岩手・秋田の物産展をやります。駅前でやりますので、ひとつよろしくお願いします。
また、愛知県のけんこうの森公園に「ふるさとの森」というものがありまして、そこに４８都道府県の木を植えてありますが、青森のヒバが枯れてしまったということで、今月の２９日に植樹します。そういうものが愛知県にあるということを、青森のことも一生懸命宣伝しますので、よろしくお願いいたします。

（知事）
頑張っていきます。県人会まつりが復活したら、またスコップ三味線をやりに行きたいです。

（知事）
３年ぶりの開催、嬉しく思っております。本当にありがとうございました。
四橋先生のまとめもとても楽しく拝聴いたしました。みがきにしんと言えば、やっぱり青森。北海道にもありますけど、タケノコと煮つけたりですとか、青森ではいろいろな形で食べられていますので、故郷のことをそういうふうに表現していただきまして、これは青森と中部圏域、名古屋圏域ともっと繋がって一緒にやっていこうということだと受けとめました。
また、本日皆様からいただいた御提言、御提案を生かさせていただくことは勿論ですが、何よりも、こうして、直接お会いするといろいろなアイデアも湧いてきますし、直接に気持ちが伝わるものでございます。
本日は、お忙しい中、こうして御参集いただき、青森のために様々な御提案いただきましたことを感謝申し上げます。これからもまた、青森を応援してください。
ありがとうございました。

（司会）
ありがとうございました。
これをもちまして、名古屋圏での「元気あおもり応援隊会議」を終了とさせていただきます。